資料５

第１　第３期中期目標期間に係る業務の実績に関する評価結果

＜評価結果＞

中期目標を達成した。

第４期中期目標期間において、引き続き、自治体病院として市民の健康の保持に寄与するため、政策医療を中心に、地域で求められる医療を安定的に提供できる体制を確保し、地方独立行政法人として、第３期中期目標期間で達成した成果をもとに、第４期中期目標及び中期計画の達成に向けた取組を進めていただきたい。

＜評価に係る判断理由＞

地方独立行政法人京都市立病院機構（以下「法人」という。）は、京都市立病院（以下「市立病院」という。）及び京都市立京北病院（以下「京北病院」という。）について、迅速な意思決定による自律的かつ弾力的な経営を行い、医療を取り巻く環境に対応していくため、平成２３年４月に地方独立行政法人として設立され、令和４年度に第３期中期目標期間を終えた。

第３期中期目標期間では、新興感染症である新型コロナウイルス感染症（以下「新型コロナ」という。）が世界中で拡大し、医療機関にとってこれまで経験したことがない非常事態に直面した。

市立病院においては、令和２年１月の新型コロナ府内初発患者受入れ以降、院内クラスター等による医療機能の制限を経験しながら、患者の受入体制を強化し、多職種連携の下、府内トップレベルの診療を行うなど第二種感染症指定医療機関としての役割を十分に果たした。また、患者支援センターの設置、緩和ケア病棟の開設、手術支援ロボットの更なる活用等、がん医療の充実や患者サービスの向上を図り、一層の医療機能強化に向けて精力的に取り組んだ。

京北病院においては、コロナ禍において、京北地域唯一の病院として、積極的に新型コロナワクチンの集団接種・個別接種に取り組むとともに、地域包括ケアの拠点施設として、地域に根差した医療・介護を提供した。

両病院とも、コロナ禍という未曽有の状況で、想定を上回る難局に対して、自治体病院としての役割を柔軟にかつ存分に発揮した。

第３期中期目標期間において、主に上記のような成果が認められたため、「中期目標を達成した」と評価する。

第２　項目別評価

＜第３　市民に対して提供するサービスに関する事項＞

Ｒ１	Ｒ２	Ｒ３	Ｒ４	中期目標期間評価	
				見込評価	実績評価
４	５	５	５	４	４

市立病院については、これまでに整備した組織基盤と医療機能を活用し、高度な急性期医療を提供する病院としての役割を一層果たしていくため、以下の取組を行った。

感染症医療の分野では、第二種感染症医療機関として、新型コロナ対応においては、感染症・結核病床を中心に専用病床を発生当初から２０床を確保し、感染拡大に伴って一般病床の一部を活用して１６床を増床し、併せて３６床を確保・運用することで、入院患者を積極的に受け入るなど、多職種連携の下、府内トップレベルの診療を行い、京都府内の新型コロナに対する医療提供体制における重要な役割を担った。

大規模災害・事故対策の分野では、令和２年２月にＤＭＡＴ隊員をダイヤモンドプリンセス号へ派遣し新型コロナ対応に従事したほか、大規模災害を想定した訓練の実施や院外の訓練、研修への参加によりＤＭＡＴ体制の充実を図った。

救急医療の分野では、適切な病棟のベッドコントロールの実施により、令和３年度及び令和４年度にはコロナ禍以前を上回る救急搬送件数に対応した。

周産期医療の分野では、身体的・精神的・社会的ハイリスク妊婦に対し、早期の段階から、保健福祉センターや児童相談所等の外部機関と連携し、出産後の母児の支援を行った。また、新型コロナウイルス陽性妊産婦の出産にも対応した。

高度専門医療の分野では、地域がん診療連携拠点病院として、緩和ケア病棟設置や手術支援ロボットダヴィンチの効率的活用など集学的治療の提供を図るとともに、がんゲノム医療連携病院として遺伝診療体制を整備するなど、幅広くがん患者の受入れを行った。

京北病院については、市立病院からの医師や看護師、医療技術職の応援の継続、両病院間の患者送迎車の運行、京北病院では実施できない医療を市立病院で提供するなど、両病院が一体となって質の高い医療を提供した。また、京北地域の医療・介護ニーズに対応し、入院・外来医療をはじめ、通院が困難な高齢者等を支えるべく、訪問診療及び訪問看護、２４時間体制での往診対応や急変時における入院受入れを積極的に行い、入院・外来・在宅・介護において幅広い医療を提供した。加えて、地域の唯一の病院として、積極的に新型コロナワクチンの住民向け集団接種や個別接種に取り組んだ。

このような点を評価し、第３期中期目標期間の実績評価を「４（中期目標を達成した。）」とする。

＜第４　市民に対する安全・安心で質の高い医療を提供するための取組に関する事項＞

Ｒ１	Ｒ２	Ｒ３	Ｒ４	中期目標期間評価	
				見込評価	実績評価
４	５	５	５	４	４

チーム医療、多職種連携の推進として、令和元年１１月に患者支援センターを開設し、多職種連携による入院前面談に取り組み、患者負担の軽減と円滑な入退院につなげた。また、専門性の高い多職種によるチームを編成し、入院前からの情報収集、入院時カンファレンスや院内ラウンドの実施等により、入院前から退院後を見据えた高度なチーム医療を推進した。

安全・安心な医療の提供においては、医療安全レポートの提出を推進し、インシデント及びアクシデント事例の迅速な把握、分析、再発防止に努めた。

医療の質及びサービス向上に関しては、病院のあらゆる質を評価する日本医療機能評価機構の病院機能評価受審に際し、多職種で構成する会議体を設置し、部門横断的に質改善、情報共有を行い、病院全体であらゆる質の改善に取り組んだことで、高評価を得た。

また、医療の質推進委員会において、プロセスフローチャートの作成や文書一元管理等に取り組むことでＱＭＳ（医療の質マネジメントシステム）を推進し、各部署におけるＰＤＣＡサイクルを活用した改善活動につなげるとともに、病院機能評価受審時に指摘のあった事項の改善を図り、病院全体で医療の質向上に取り組んだ。

このような点を評価し、第３期中期目標期間の実績評価を「４（中期目標を達成した。）」とする。

＜第５　業務運営の改善及び効率化に関する事項＞

Ｒ１	Ｒ２	Ｒ３	Ｒ４	中期目標期間評価	
				見込評価	実績評価
４	４	４	４	４	４

組織運営においては、理事長自らが機構職員へ新規採用職員オリエンテーションや年頭訓示等を通じて、法人理念や病院憲章、倫理方針を伝達するとともに、理事長ヒアリングや病院運営会議等において経営状況を説明し、目標を組織全体に直接指示するなど、理事長のリーダーシップの下、組織的・効率的な運営を行った。

また、コロナ禍においては、理事長及び理事者が出席する新型コロナウイルス対策本部会議を毎週開催し、各部門からの課題や対応手順の変更など、感染拡大状況に応じて、迅速に意思決定し、全職員への情報共有を図った。

優柔な人材確保・育成においては、病院説明等を利用して、医療情勢を踏まえ、柔軟に取り組んだ。コロナ禍により就職説明会や病院見学の受入れは限定的となったが、ＷＥＢ説明会やＬＩＮＥでの広報活動を開始、また、看護部では紹介動画を作成し、動画サイトに掲載するなどの採用活動を実施した。

また、外国人対応の充実においては、コロナ禍にあって外国人受診者は減少しているが、市立病院では京都市医療通訳派遣事業を利用した医療通訳者の配置、各種説明文書の外国語版の作成を実施するとともに、医療通訳タブレットの継続導入や自動翻訳機（ポケトーク）の導入により、医療通訳不在時においても外国人患者が安心して受診できる体制を整えた。

このような点を評価し、第３期中期目標期間の実績評価を「４（中期目標を達成した。)」とする。

＜第６　財務内容の改善に関する事項＞

Ｒ１	Ｒ２	Ｒ３	Ｒ４	中期目標期間評価	
				見込評価	実績評価
４	２	４	４	４	４

医業収益の向上を目指して、地域の医療機関との機能分化と連携により、２人主治医制の下、症状の安定した患者を積極的に逆紹介し、外来業務の効率化を図るとともに、紹介や救急患者を積極的に受け入れ、入院や手術件数の増加を図った。

また、多職種で構成されるベッドコントロール会議等の体制を構築して、在院日数の適正化と病床利用率向上に取り組んだほか、ロボット支援手術等の手術件数の増加や各種加算取得により診療単価の上昇につなげた。

支出面においては、医薬品について後発医薬品やバイオ後続品への切替えを進めたほか、診療材料については、経費圧縮を図るべく院内における共同購入を推進するとともに、価格交渉を実施することで、費用の効率化を進めた。

収支については、令和２年度はコロナ禍の影響を病院経営に大きく受け、患者の受診控え、院内クラスターの発生やそれに伴う一般診療の受入停止等により、法人全体で過去最大の赤字（１４億円）となった。なお、当該赤字については，公的病院である市立病院が、コロナ患者を当初から受け入れ続ける役割を果たす中でのやむを得ないものであった。

令和３年度は、市立病院において、新型コロナ専用病床の設置やそれに伴う一般病床（病棟）の休床を実施し、京都府内トップクラスの患者数受入れなどにより、新型コロナ対応に係る補助金として１８億円を収入した結果、純損益８．３億円の黒字となった。

また、京北病院においても、京北地域の住民に対して、新型コロナワクチンの接種事業を積極的に実施したほか、運営費負担金の増額により、純損益では平成２４年度以来の黒字となった。法人全体では、純損益が８．７億円の４年ぶりの黒字となった。

令和４年度においては、市立病院では、コロナ禍による受診動向の変化や感染症対策上の病床利用制限等により病床利用率が前年を下回る結果となったが、令和４年度も引き続き、積極的に新型コロナ専用病床の設置やそれに伴う一般病床の休床を実施したことに伴い、新型コロナ対応に係る補助金等２６億円を収入した結果、市立病院の純損益は、１２．４億円の黒字となった。

京北病院では、へき地医療拠点病院並びに地域のかかりつけ医として使命を果たすべく、京北地域の住民に対して、新型コロナワクチンの接種事業を積極的に取り組んだ。一方、超高齢化と若年層の減少は顕著に続いていることや、新型コロナ感染拡大の影響等から外来・入院患者数が前年比で減少し、３５百万円の赤字となった。

なお、法人全体としては、純損益が令和３年度を上回る１２億円の２年連続の黒字となった。

このような点を評価し、第３期中期目標期間の実績評価を「４（中期目標を達成した。）」とする。

なお、新型コロナの影響が今後も不透明であることに加え、今般の原油価格や物価高騰等の影響も予想されることから、安定した病院運営が行えるよう、着実かつより一層の経営改善が求められる。

＜第７　その他業務運営に関する重要事項＞

Ｒ１	Ｒ２	Ｒ３	Ｒ４	中期目標期間評価	
				見込評価	実績評価
４	４	４	４	４	４

ＰＦＩ事業については、より効果を発揮するため、提供サービスのモニタリングと業務改善会議を継続し、病院職員と受託先の株式会社ＳＰＣ京都とが綿密な意見交換を行い原因分析と改善策の検討を行ったほか、両者の一体的業務運営を進めることで、病院基盤の強化や患者サービスの向上等に取り組んだ。

市民の健康づくり活動の推進においては、市立病院では、健康教室や出前講座を実施したほか、令和２年度から市民公開講座を開催するとともに、栄養指導として入院・外来栄養指導に加え母親教室や糖尿病教室でも指導を行い、市民の健康づくりに貢献した。京北病院においても、京北出張所と連携し、市民対象の出前講座を実施したほか、右京区役所での市民対象の講演等を行った。

このような点を評価し、第３期中期目標期間の実績評価を「４（中期目標を達成した。)」とする。

（参考）

大 項 目 評価基準	５ 中期目標を大幅に上回り、特に評価すべき達成状況にある	４ 中期目標を達成した	３ 中期目標を概ね達成した	２ 中期目標を十分達成できていない	１ 中期目標を大幅に下回っている又は重大な改善すべき事項があった